

ロシア・フォークロアにおける 類義語反復について

伊 東 一 郎

1

近年プロップやレヴィ=ストロースによる民話および神話の構造分析に関する研究が紹介されて以来、フォークロアの形態論的・意味論的構造に関する関心は高まりつつあるが、フォークロアの文体論的構造に関する研究は、この分野に比べるとほとんど未開拓の現状である。しかしシクロフスキは『題材構成の手法と文体の一般的手法との関係』(1919)⁽¹⁾でフォークロアの題材構成の諸手法と文体論的なそれとは、レベルの異なる同じ原理のあらわれであることを主張し、フォークロアにおけるモチーフの反復と類音語反復、類義語反復等の手法との間に類比的な関係をみたのである。言いかえれば、フォークロアの階層的な作品構造を統一的な視野のもとに把握する可能性が具体的に示唆されたのであるが、筆者の関心も、ロシア・フォークロアの表現構造の全体を、文体論的レベルから題材構成のレベル、さらに作品行為のレベルに至る諸レベルのそれぞれの表現構造を明らかにすることによって統一的に把握することにあり⁽²⁾、本論もその全体の中に位置づけられるべきものとして構想されている。本論ではロシア・フォークロアにおける文体論的手法のうち、類義語反復をとりあげ、その具体的な諸相を検討しつつ、この手法がになっていると思われる機能について考察したい。

具体的な検討に移る前に、まず「類義語」という術語の概念規定を行なっておきたい。筆者は本論で「類義語」という術語を、ロシア語の《СИНОНИМ》、英語の《synonym》に相当する意味において使用するが、ロシア語および英語におけるこの術語の概念規定は必ずしも明確ではない⁽³⁾。この術語は同義語とも訳されるが、異なる音声形態を持ち、かつ完全に同一の意味を持つ語の認定は困難であり、事実上は様々な同義性の程度を持つ類義語をさす場合が多い。カッツは、二つの語彙項目が一つの意味素性を共有するものを一義同義(synonymous on a sense)、すべての意味素性を共有するものを完全同義(fully

synonymous) と規定し、類義語という術語によって意味されるものの範囲を、この両極によって規定している⁽⁴⁾。この規定に従うと、反義語——即ち一つの意味素性において対立し、他の意味素性を共有する語——も類義語の一種となるという矛盾をまねくが、これは逆に類義語と反義語との違いが相対的なものでしかないことを示しているものといえる。さらにこの事実は、後述する意味論的に矛盾した類義語反復の意味解明に一定のてがかりを与えるものと期待されるのであり、その意味から本論では類義語を、カッツに従い、一つ以上の意味素性を共有する語と規定しておく。

さてフォークロアにおけるこの類義語反復という現象は、古くからポチェブニャー、ミクローンチ、ブスラーエフ等の言語学者の注意をひいてきたが⁽⁵⁾、この現象そのものを対象として行なわれた研究は多いとはいえない。その中で最もまとまったものとしては、А. П. Евгеньева の《Очерки по языку русской устной поэзии в записях XVII—XX вв. (Л., 1963)》における〈Синонимические сочетания и их роль в устной поэзии〉の章があげられよう。ここで著者は、ロシア・フォークロアのうち叙情歌および叙事詩のジャンルについてこの現象を検討している。著者は、この手法の機能について必ずしも明確な結論を下しているとは言えないが、この論文にひかれた多くの実例は貴重なものであり、筆者もそれに多くを負っている。

2

具体的な実例の検討に移りたい。ロシア・フォークロアにおける類義語反復のあらわれ方は様々であるが、特に叙事詩や叙情歌では、複数の類義語が並列された詩行＝シンタックスにおいてあらわれ、シンタックスのパラレリズム、即ちいわゆる対句を形成する手段として機能していることが多い。例をあげれば次のとおりである⁽⁶⁾。

Не спала—то я, младшенька, не дремала,
Я не думала, младшенька, не гадала.

(Пропп, стр. 143)

Ах, матушка, тошно мне, голова болит,
Сударыня, грустно мне, сердечко ноет.

(Пропп, стр. 157)

Было пированья почестной пир,
Было столованья почестной стол.

(Евгеньева, стр. 254)

Я из горницы во горницу ходила,
Я из светлицы во светлицу гуляла.

(Евгеньева, стр. 279)

また一つの詩行において並列的にあらわれる場合も多い。叙事詩および叙情歌における例をあげれば次のとおりである。

С половины пути, со дороженьки
Назад воротился.

(Пропп, стр. 144)

Как бы я знала, млада, ведала
Неприятство друга милого

(Пропп, стр. 154)

А утоптана трава, утолочена мурава.

(Евгеньева, стр. 255)

Кричит он, ревет зычным голосом.

(Евгеньева, стр. 274)

А смотрит он, глядит, думу думает.

(Евгеньева, стр. 274)

Мы тебя поставим царем в орду, королем в Литву.

(Потебня, стр. 418)

また諺の場合には、並列複文の形式のそれにしばしばみることができる。

Не спеши языком, торопись делом.

(Жуков, стр. 299)

Что город, то норов, что деревня, то обычай.

(Жуков, стр. 499)

Часом с квасом, порой с водой.

(Жуков, стр. 487)

また慣用句にもしばしばみることができる。

сколько лет, сколько зим
до поры, до времени
ни к селу, ни к городу
без роду, без племени

また民話の冒頭では、しばしば状況語が反復される⁽⁷⁾。

На море, на океане, на острове Буяне

В некотором царстве, в некотором государстве

さて以上のような類義語反復は、しばしば合成語的に直接並置される。まず動詞の例をあげれば次のとおりである。

Уж как полно, моя сударушка, *тужить-плакать!*
(Пропп, стр. 168)

На крутом славном бережке,
Она *кричала-зычала.*
(Пропп, стр. 297)

Стал Вольга *ростеть-матереть.*
(Кравцов, стр. 153)

По саду, саду, по зеленому,
Ходила-гуляла молода княжна.
(Кравцов, стр. 149)

Он *смотрел-глядел* на вси на дальны стороны.
(Кравцов, стр. 199)

Жил-был старик да старуха. (民話)

次に名詞の例をあげる。

Послужи мне верою, да ты *верою-правдою.*
(Евгеньева, стр. 263)

Когда было молодцу *пора-время* великая, *честь-хвала* молодецкая.
(Евгеньева, стр. 263)

Не насеять будет чиста поля *тоской-кручиной.*
(Пропп, стр. 169)

Эх, к *любешке-сударушке*, эх, нельзя в гости ехать молодцу.
(Пропп, стр. 142)

Обратись, моя кручина, *травой-муравою.*
(Пропп, стр. 167)

Пивцом-винцом меня поят.
(Пропп, стр. 124)

Хвалил он, похваливал
Он свое *житье-бытье.*
(Пропп, стр. 131)

конца-краю нет (慣用句)

その他しばしばみられるものを列挙すれば次のとおりである。

грусть-тоска, море-океан, царь-государь, ласточка-касаточка, лягушка-квакушка, огонь-пламя, путь-дорога, спесь-гордость, род-племя, правда-истина, очи-глаза, речь-поговорье, горе-кручина⁽⁸⁾

以上の例からもわかるように、合成語的に直接並置される類義語は、名詞の場合が最も多いのであるが、その機能や意味を考察する場合に最も困難な問題を提出するのもこの名詞における類義語の並置の場合である。何故ならこのタイプの類義語の結合は、形態上一種の並列合成語ともみなされうるからである。一般にロシア・フォークロアにおいては並列合成語が好んで用いられる傾向があり、ポチェブニャーは、それらの合成語のタイプを次の三つに分類している。1) 限定合成語。これは二つの構成要素間に〈限定——被限定〉の関係を認めうるもので、ポチェブニャーはこのカテゴリーに属するものとして *дани-пошлины*, *рать-сила*, *сила-войско*, *пир-радость* 等の語結合をあげている。2) (サンスクリット文法における) いわゆる《dvandva》。これは、明らかに意味の異なる二つ(またはそれ以上)の語を並置して構成される合成語で、その異なる類概念のうち概念の単一性を包摂するものである。ポチェブニャーは、ここに *отец-мать* の如き反義語の結合や、*хлеб-соль* の如き合成語を分類している。3) 類義語結合。この概念は本論で取り扱っている類義語結合のそれにほぼ一致する⁽⁹⁾。

さてこのポチェブニャーの分類においては、類義語の概念規定が明確でない為、ある種の混乱がみられる。たとえば彼は *род-племя* を反義語の結合として扱い、dvandva に属する合成語とみなしているのだが、現代ではこの二語はむしろ類義語とみなするのが普通であろう。この事実は、上述のように類義語と反義語の区別が相対的なものでしかないことを再確認するものであって⁽¹⁰⁾、少なくとも検討してきた文体論的手法においては、この両者は同じ機能をはたしていると考えらるべきであろう。即ちロシア・フォークロアにおける意味論的反復が語のレベルにおいてあらわれる時、意味論的な連合関係にある語は、類義語から反義語に至るまで広い意味の類義語として機能しているのである。実際に、意味論的に差異と相似によって相関しているすべての語は、潜在的に類義語でありかつ反義語である。言語には差異しかない、というソシュールの認識に従えば、あらゆる類義語は、相互にその差異性によってのみ相関していることになり、この事実は上述のカッツによる類義語の定義と矛盾しない。

さてロシア・フォークロアにおいて類義語反復の手法に用いられる語を、以上のように意味論的な連合関係にある語として規定すると、一般的には類義語とは言えない様々な関係によって相関している語の結合をも、この手法に属するものとして統一的に扱うことができる⁽¹¹⁾。次にそれらの、類義語反復に準じて扱うことができると思われる手法について考察をすすめたい。

3

ロシア・フォークロアにおいて、この類義語反復の手法は、常に可能であるとは限らない。この手法は、たとえばそれを動植物の名称について行なおうとする時に、ある種の困難に直面する。何故なら動植物の名称で、相互に交換可能な類義語を持つものは、ごく少数（例えば *ласточка-касаточка*, *лягушка-квакушка*）しかないからである。この為、動植物の名称においては、階層的関係、すなわち〈種一属〉の関係にある語が、しばしば類義語として用いられる。例をあげれば次のとおりである。

На горушке *ковыль-трава*
Не стелется, вьется.

(Пропп, стр. 132)

Похотелося Вольги да много мудростей:
Щукой-рыбою ходить Вольги во синих морях,
Птицей-соколом летать Вольги под оболочки.

(Кравцов, стр. 153)

На малиновом на прутьшке,
Соловей-птица песни поет.

(Оссовецкий, стр. 496)

同じ理由から動植物の名称における類義語反復はしばしば、同じカテゴリーに属する動植物名によって実現される。例をあげれば次のとおりである。

Под *калинкою*, под *малинкою*
Спит, покоится добрый молодец

(Оссовецкий, стр. 496)

Под *грушицей* зеленою, под *яблонцей* садовою

(Оссовецкий, стр. 496)

Под *вишеньем*, под *орешеньем* стоит конь

(Оссовецкий, стр. 496)

Плыла лебедь с *лебедятами*
Со малыми со *утятами*.

(Оссовецкий, стр. 496)

А бьет он *гусей*, белых *лебедей*,
А и серым малым *уткам* спуску нет.

(Кравцов, стр. 150)

これらの動植物名は、カテゴリーを同じくするといっても、明らかに異なる対象をさすものであるから、この手法がしばしば矛盾した表現を生むのは当然の

結果といえる⁽⁴⁾。この矛盾は、特に *путь-дорога* の如く並列されて表現される際にあらわれる。例をあげれば――

Заросла моя полосынька

Чистым ельничком-березничком.

(Оссовецкий, стр. 496)

Не ясен сокол на гусей-лебедей напускается,

Илья Муромец на рать-силу великую.

(Рыбников, т. 3, стр. 674)

このタイプの矛盾が最も顕著にあらわれるのは、類義語を持たない固有名詞によってこの類義語反復が行なわれる場合である。この際、類義語として用いられるのは、上述の動植物名の場合と同様、同じカテゴリーに属する他の固有名詞である。例をあげれば次のとおりである。

Да и поехали ко матушке к каменной Москвы,

К каменной *Москвы* к хороброй *Литвы*.

(Потебня, стр. 419)

А во той было *Индеюшки* богатыи

Да во той было *Корелы* во проклятыи

А был молодой боярин Дюк Степанович.

(Потебня, стр. 419)

これらの表現にみられる矛盾は、明らかに、類義語を持たない語彙が類義語反復の手法を自己目的化した結果うまれたものと考えらるべきであろう。次にこの視点から、民話にみられる同様の矛盾を含んだ表現について考察をすすめたい。

4

アフナーシェフの民話集には、第113話として《гуси-лебеди》と題された民話が収められている（番号は1957年版による。以下も同様）。この《гусь-лебедь》なる鳥が具体的にどのような鳥を意味しているかは、本文からは明らかではない。本文の後半では、この鳥は単に《гусь》とよばれている。またソビエトの絵本などでは、逆にしばしば《лебедь》の姿に描かれているのである。ポチェブニャーは、前節で検討した明らかに異なる動植物名の結合について、超自然的な、理想化された動植物を暗示しているのだろう、としており、民話以外のフォークロアにもしばしばみられるこの《гусь-лебедь》なる語結合（実際には、もっぱら複数形であらわれる）をも同じカテゴリーに属するもの

としているのだが¹⁴⁾、はたしてそうであろうか。検討してきた多くの類義語反復の例から、筆者は、この語結合は、明らかに類義語反復に由来するものであり、それが実体化したものであると考えたい（19—20ページにあげた гусь と лебедь を明らかに類義語として取扱っている例を参照のこと）。従って《гусь-лебедь》という語結合の意味は、それが具体的に何をさすかという視点からではなく、類義語反復という文体論的手法一般との関係から考察すべきであると筆者は考える。

同じ視点から解明されうる同様の語結合の例を、民話からもうひとつひいておこう。アフナーシェフの民話集の第179話に登場する《сивко-бурко》（ワリアントによっては《сивка-бурка》）という馬の名称は、異なる毛色を持つ馬の名称が結合されてできた合成名詞であるが、この馬が実際にどのような毛色をしているかはやはり本文からは明らかではない。しかしこの名称が本文にあらわれるのは、この馬をよびだす際の言葉《Сивко-бурко—вещшой воронко!》においてのみであり、その外の文章においては、ただ単に《сивко》とよばれていることを考えると、この名称も、馬に対する呼びかけに際してあらわれた類義語反復が実体化したものと考えられる。ダーリの記載では、この呼びかけは《Сивка, бурка, вещей коурка》となっており、最初の二語はハイフンで結ばれていない¹⁵⁾。これは明らかに同一の対象に異なる名称で呼びかけている言葉である。ところでここで注意すべきことは、このような表記の違いにもかかわらず、フォークロア一般においては、テキストは口頭で伝えられるものであるから、たとえば《гусь-лебедь》と《гусь, лебедь》との、または《сивка-бурка》と《сивка, бурка》との区別は事実上存在しないということである。即ち合成名詞的にハイフンで結合された表記は、既に採録者の判断あるいは解釈を反映しているということであって、このような表記によって民話のテキストを読む読者は、必然的に《гусь-лебедь》や《сивка-бурка》についてコマで並列された時とは異なるイメージを抱くはずである。このような過程によっても、フォークロア一般にみられる文体論的な類義語反復の手法は、イメージとして実体化する可能性をはらんでいたといえよう。

5

最後に、この類義語反復という文体論的手法の機能と位置づけについて述べておきたい。この手法は、ロシア・フォークロアに一般的にみられる反復の手法が、語を単価単位として意味論のレベルにおいてあらわれたものといえるが、この反復の手法は一般的にメッセージの被知覚性、即ちメッセージそのも

の自己表出性を高める機能を持っていると思われる。ヤーコブソンは、詩的テキストにおける様々なレベルでの反復を「文法的パラレリズム」の概念によって統一的に捉えているが⁸⁹、これは最初に紹介したシクローフスキイによるアナロジーと基本的に一致する。ところでヤーコブソンの「文法的パラレリズム」の概念を支えているのは、「言語学と詩学」⁹⁰における言語の詩的機能の概念である。彼はこれを次のように定式化している。「詩的機能は選択軸における等価の原理を結合軸に投影する。」この定式は、詩的言語が、体系内において範列的にのみ連合しあっている音や形式や意味を、連鎖内において連辞的に再現するような構成をめざすことを意味している。ところで類義語反復とは、意味論的レベルで連合しあっている語、即ち日常的言語では選択されるべき語が結合される現象であるから、ヤーコブソンの定式の一つの具体的な実現と考えられよう。またこのヤーコブソンの定式は第2節で筆者がこの手法に与えた定義とも一致する。この視点にたてば、意味論的な矛盾をひきおこしている類義語反復も、メッセージそのものの自己表出性を高める為の手法として自己目的化されたものと解釈できよう。また一般的にフォークロアにおける意味論的反復は、以上のような美的機能と共に、メッセージの意味論的冗長度を高める機能を持っていて、この類義語反復の手法も、同様の機能をになっていると考えられる。即ちこの手法は、言いかえによる情報の確実化という性格を持っており、一種のメタ言語的操作である。このことは特にフォークロアが口頭で伝えられるものであることと関係があろう。書かれたテキストと異なり、読みかえすことによって情報を確認することの不可能なフォークロアのテキストにおいては、その情報伝達を確実なものにする為、意味論のレベルにおける冗長度をできるだけ高めようとする傾向が必然的にうまれるのである。従ってこの視点からは、《гусь-лебедь》および《сивка-бурка》の如き矛盾した類義語反復も、それぞれ鳥および馬という共通の意味素性を強調するという意味においては、同様の機能を果しているといえよう。類義語反復という手法において、このどちらの機能が本質的なものであるかを決定することは困難であるが、少なくともこれらの機能がヤーコブソンの定式どおり、選択軸の結合軸への転位という方法によって実現されていることは事実である。上述のようにヤーコブソンはこの方法を詩的言語一般の法則として定立したのであるが、筆者はこの方法は、むしろフォークロアにおける文体論的手法の一般法則として定立されるべき必然性を持っていると考える。何故ならフォークロアにおいては、閉じられた体系＝規範内の限定された諸要素の組合せによって新しい表現を獲得しよ

うとする傾向が必然的に生まれるからで⁽⁷⁾、選択軸の結合軸への転位という方法はこのようなフォークロアの表現志向を満足させる最も容易な文法的手段であるからである。この点でむしろ規範からの偏差を志向する個人的な創作と、規範内での非日常的表現を志向するフォークロアとは決定的に異なる⁽⁸⁾。一般的にフォークロアが文体論的レベルにおいて文法的手段を最大限に活用するのはこの為である。

以上ロシア・フォークロアにおける類義語反復の諸相とその機能について論じてきたが、一般的にフォークロアにおける文体論的特徴の必然性は、以上のようにフォークロアそのものの表現の志向と、そのフォークロアの表現を具体的に規定する所与の言語の構造との相関によってかなりの程度まで客観的に解明できるものと思われる。この意味からロシア・フォークロアにおける文体論的問題は、美学的、情報論的問題のみならずロシア語学一般にも多くの問題を提起するものと思われるのである。

注(1) Шкловский В., Связь приемов сюжетосложения с общими приемами стиля—в кн.: О теории прозы, М., 1925.

(2) 叙情歌のジャンルでそれを試みたものとして、拙稿「民謡における音楽と言語」(早大大学院文学研究科紀要 別冊1, 1975)がある。

(3) См. Ахманова О., Словарь лингвистических терминов, М., 1966, стр. 407.

(4) Katz J., Analyticity and Contradiction in Natural Language—in: Fodor J., Katz J. (ed.), The Structure of Language, Readings in the Philosophy of Language, New Jersey, 1964, p. 532.

(5) См. Евгеньева А., Очерки по языку русской устной поэзии в записях XVII—XX вв., Л., 1963, стр. 254—256.

(6) 平行的な詩行における類義語反復については、Евгеньева А., ук. соч., стр. 277—281 を参照。また以下の事例の引用に際しては、その出典を次の略号で示す。Евгеньева—Евгеньева А., ук. соч.; Жуков—Словарь русских пословиц и поговорок, Составил В. Жуков, М., 1966; Кравцов—Русское народное поэтическое творчество, Хрестоматия, Под редакцией проф. Н. Кравцова, М., 1971; Оссовецкий—Оссовецкий И., Стилистические функции некоторых суффиксов имен существительных в русской народной лирической песне—Труды Института языкознания АН СССР, т. 7, М., 1957; Потенбня—Потенбня А., Из записок по русской грамматике, т. III, М., 1968; Пропп—Пропп В. (ред.), Народные лирические песни, Л., 1961; Рыбников—Песни, собранные П. Н. Рыбниковым, т. 3. Издание второе, М., 1910.

(7) 民謡の冒頭における類義語反復は、他のフォークロアのジャンルにおけるそれと

は異なる機能をも持っている。民話の冒頭文は、既知の情報を前提とすることができないから、これを補うために実質的には意味のない、存在を示す動詞や状況語が文頭にたつ傾向があり、しばしば反復される。これは言語の違いをこえて広く民話一般にみられる傾向であって、独立した研究に値しよう。マテジウスは、この現象をシンタクスの問題として扱っている。Матезиус В., О так называемом актуальном членении предложения—в кн.: Кондрашов Н. (ред.), Пражский лингвистический кружок, М., 1967.

- (8) これらの類義語反復には、音韻論的にも動機づけられているものが少なくない。例えば名詞においては——

калина-малина, трава-мурава

動詞においては——

целует-милует

шатается-мотается

сею-вею, жил-был

同時に音韻反復をも構成するこれらの類義語反復において特徴的なことは、唇音を語頭に持つ語が必ず後置されるということである。ヤーコブソンはこの現象を、*коляда-моляда, гусли-мусли* といった音韻反復の為の造語からの類推によるものとしている。См. Якобсон Р., Новейшая русская поэзия, Прага, 1921, стр. 55—56.

- (9) Потербня А., Из записок по русской грамматике, т. III, М., 1968; См. Евгеньева А., ук. соч., стр. 255—256.

- (10) たとえばロートマンは、現代語では類義語とみなされている《честь》と《слава》が、キーエフ・ロシア時代においてはむしろ封建制内部の階級的対立を反映した反義語であったことを論じている。Лотман Ю., Об оппозиции 《честь》—《слава》 в светских текстах киевского периода—Труды по знаковым системам, III, Тарту, 1967; これら対をなす類義語及び反義語は、文体論的レベルのみならず作品全体の構造においても重要な役割を果たしている。一般的に類義語と反義語の関係は意味論の構造化に対して重要な問題を提起するが、グレマスの『構造的意味論』は、この問題をプロップによる民話の、レヴィ=ストロースによる神話の構造分析との相関において扱っている点で注目される。Greimas A, *Sémantique structurale, Recherche de méthode*, Paris, 1966.

- (11) この視点からは、ロシア・フォークロアにおける、ポチェブニャーのいわゆる《dvandva》と類義語反復の二つのカテゴリーは統一的に扱うべきであろう。なおポチェブニャーが限定合成語としてあげているものの中には、類義語反復として扱うべきものが多い。ポチェブニャーのこの現象の取扱い方は、一貫して歴史的・発生論的である。またロシア語一般における並列合成語に関しては、Молошная Т., Двухкомпонентные субстантивные образования аппозитивного типа в славянских языках—в кн.: Структурно-типологические исследования в области грамматики славянских языков, М., 1973 を参照。

- (12) 同様の矛盾を含む動植物名の反復の例については、Оссовецкий И., ук. соч., стр. 495—497 参照。
- (13) Потехня А., ук. соч., стр. 421—422. なお民話における《гусь-лебедь》のイメージについては、内田莉莎子訳『バーバ・ヤガーの白いとり』福音館書店 1973の訳者解説を参照のこと。
- (14) Даль В., Толковый словарь живого великорусского языка, Второе издание, тт. 1—4, М., 1880—1882, т. 4, стр. 180. なお Ожегов の記載では、《сивка-бурка》(Ожегов С., Словарь русского языка, Издание девятое, М., 1972, стр. 658) であり、Ушаков の記載では《Сивка, бурка, вещая каурка》(Толковый словарь русского языка, под ред. Д. Ушакова, тт. 1—4, М., 1935—40, т. 4, стлб. 171) である。なお Новиков Н., Образы восточнославянской волшебной сказки, Л., 1974, стр. 155 を参照のこと。
- (15) この概念に関しては、Jakobson R., Grammatical parallelism and its Russian facet—《Language》, 42, 1966; Poetry of Grammar and Grammar of Poetry—《Lingua》, 21, 1968 を参照。
- (16) Jakobson R., Linguistics and poetics—in: Sebeok T. (ed.), Style in Language, N. Y., 1960.
- (17) これはいわばレヴィ=ストロースが「プリコラージュ」とよんだものの言語芸術におけるあらわれである。レヴィ=ストロース『野生の思考』大橋保夫訳 みすず書房 1976年, 26—41ページ参照。
- (18) この点に関しては、Bogatyrev P., Jakobson R., Die Folklore als eine besondere Form des Schaffens (1929)—in: Jakobson R., Selected Writings, 4, The Hague-Paris, 1966 を参照。